

■ 「たたら」の語源 と 「たたら」製鉄に語源を持つ言葉

日本古来の製鉄 たたら

「たたら」

「たたら製鉄」とは日本古来の製鉄法のことを言います。

われわれの祖先が営々として築き上げた日本独特の製鉄法で、千年以上の歴史をもつものです。

「たたら」という言葉は元来「ふいご」を意味する言葉のようです。

非常に古い言葉で、日本書紀に神武天皇のお后になる「媛踏鞴五十鈴姫命（ひめたたらいすずのひめのみこと）」のお名前が出て来ます。

「踏鞴」と書いて「たたら」と読ませています。踏鞴は「踏みふいご」のことです。

この姫は出雲の神、事代主命の姫と言われ、我が国の鉄の主要な産地となる出雲の姫の名前に踏鞴がついていることは非常に興味があります。

さらに、踏鞴で鉄を吹くことから「鉄を製錬する炉」のことも、「たたら」というようになりました。

漢字で「鑪」と書いて「たたら」と読ませます。さらに、「炉全体を収める大きな家屋、すなわち高殿（たかどの）の」こと、さらにはこれら全体を含めた製鉄工場も「たたら」と言うようになりました。



○ たたらの語源

「たたら」という言葉ははっきりしないのですが、「強く熱する」という意味で、金属製錬と密接に関係し、インドあるいは中央アジアに源をもつ外来語のようである。

古事記には百済（くだら）、新羅（しらぎ）との交渉の場に「たたら場」とか、「たたら津」などが出て来ますので、朝鮮半島からの製鉄技術の伝来とともに「たたら」という言葉も伝わって来たのかも知れません。

古代朝鮮語で「たたら」を解釈すれば「もっと加熱する」という意味とのことという。

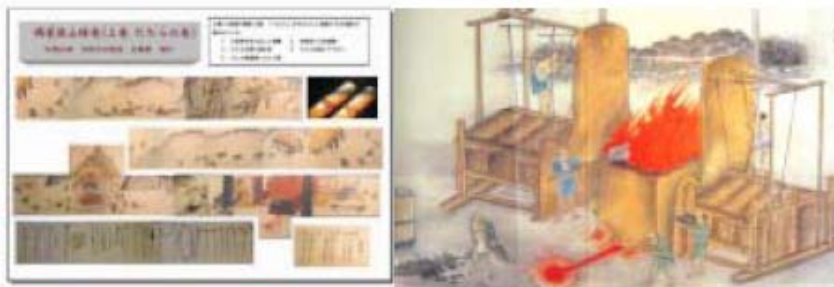
窪田蔵郎氏は、たたらをダットン語のタートル（猛火のこと）から転化したものでないかとしています。 《 タートル 》

安田徳太郎氏によれば、古代インド語のサンスクリット語で「タータラ」は「熱」の意味。ヒンディー語では「鋼」を「サケラー」と言うが、これは出雲の「鋼」にあたる「ケラ」と似ている。また、ミャンマー語で「刀」は「カタナ」と言う。

これらから、「たたら製鉄法」はインドの製鉄技術が東南アジア経由で伝播したものではないかと言っています。

日立金属 ホームページより、<http://www.hitachi-metals.co.jp/tatara/nnp01.htm>

たたら製鉄に語源を持つ言葉



- 地団駄（じたんだ）を踏む
これは”地踏躰（じたたら）を踏む”が音便変化したものとされています。
踏躰は普通、ふいごと呼ばれて、金属の精錬や鍛造をする時に、火力を強めるため、古代から使われていた簡単な送風機のことです。そして、大型の踏躰を地踏躰といいました。この地踏躰で何本もの足が交互に踏み板を踏んでいる様子が、怒りや悔しさに地を踏み鳴らす格好に似ている事からこの言葉が出来たといわれています。
- 駄々（だだ）こねる
子供があまえてわがままを言うことを駄々をこねると言いますね。
この駄々は地団駄が語源です。じたたら→じたんだ→だだ。なお、駄々は当て字だそうです。
- 踏躰を踏む（たたらをふむ）
勢い込んで打ち込んだり、または突いたのがはずれたために、力があまって、から足を踏むことを言います。この格好が踏躰を踏む時の格好に似ているからです。お芝居などで使います。
- 代わり番こ（かわりばんこ）
踏躰を踏むのは熱く苦しいので交代で行わないと倒れてしまいます。この踏躰を踏むための順番を番、人間を番子と言いました。つまり交代しながら仕事をする事を総称して番子といったのです。

鍛冶屋さんと鑄物工場に由来する言葉



- 相槌（あいづち）
鍛冶などで師匠の打つ間に弟子が槌を入れることや、互いに槌を打ち合わす事を相槌と言いました。両者の呼吸が合わなければ良い物が出来ないので、他人の話に調子を合わせる意味になったのです。
- 頓珍漢（とんちんかん）
物事が行き違う事やちぐはぐな事、訳のわからないことを言います。
頓珍漢は当て字です。鍛冶屋の相槌の音が語源です。
交互に打って、一緒に打つことはないことからです。
- おシャカになる
物が壊れたりする事を「オシャカになる」と言います。
この語源は4月8日の花祭り（お釈迦様の誕生日）からきているというのが有力です。
鑄物工場で、ふいごの火が強すぎると鉄が駄目になってしまいます。
これを江戸弁で「しがつよかった（火が強かった）」といったのが、4月8日と音が似ていたのでオシャカになるとしゃれたと言うようです。

《「たたら製鉄」関連名・地名》

○ 「クサ・種」

兵庫県千種町 製鉄神 金子神 降誕の地岩野辺があり、古代より、たたら製鉄の栄えた土地である。この「種」は鉄の意である。「トクサ 徳佐」もまた この「クサ・種」から派生する関連地名という。

○ 「サビ」とは鉄のこと

素盞鳴の断蛇剣が、韓鋤(カラサビ)と呼ばれている。列島在来産ではなく朝鮮半島渡来の鉄剣か、もしくは韓から新しく渡来した新技術で吹かれた、鋭利な鉄剣だったとアピールしていることも確かだろう。

○ 、

○ 鉄の原料である砂鉄や材料に係わる地名

蟹沢、金ヶ沢、砂子沢 (いなごさわ) 金山 (かねやま) など

○ 製鉄炉や鉄の生産加工に関連する地名

踏鞴 (たたら)、大平 (おおひら)、雷 (いかづち)、鍛冶屋敷など

○ 生産された鉄製品の流通を仲介したとみられている神人と関連した地名

八田 (はった)、神田 (かんだ)、飛鳥田 (あすかだ)、八幡田 (やわただ) 等

○ 製鉄や須恵器の生産技術を持つ工人集団の出自を表わしたとみられる地名

和泉国や今木郷の出自であったことから工人達の出身地である「泉」

百済王に近い鉄工人集団は「寒川」地名

泉、今泉、小泉、泉田、泉八日、泉沢、寒川等

古代鉄関連の地名

